なんでもふたつさん

クラッチ作 ビーゼ絵 光吉夏弥訳 大日本図書

あるところに「なんでも ふたつ」さんと よばれる ひとが いました。なまえの とおり、かう ものも、きる ものも、たべる ものも、なんでも ふたつずつ でないと、きに いりませんでした。それで、いえも ふたつ、しごとも ふたつ、でかける ときは、くつを 二(に)そく はきました。

「なんでも ふたつ」さんが ざんねんに おもうのは、おくさんと 子(こ)どもが ひとりだと いうことでした。

ところが、あるひ「なんでも ふたつ」さんが うれしくなる ことが おこったのです。さて、それは？